

2025年度 第1回教育課程編成委員会 議事録

日時 : 2025年7月16日(水) 13:53~15:00
場所 : 愛仁会看護助産専門学校 2階会議室
委員(敬称略): 公益社団法人大阪府看護協会 会長 弘川 摩子
Office Kyo-shien 代表 池西 静江
社会医療法人愛仁会 カーム尼崎健診プラザ 所長 松森 良信
社会医療法人愛仁会 愛仁会本部 看護部門特任理事 増山 路子
愛仁会看護助産専門学校 学校長 本山 覚
愛仁会看護助産専門学校 副学校長 藤尾 泰子
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 教育主事 小林 理絵、清水 弘子
愛仁会看護助産専門学校 助産学科 教育主事 大石 有香
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 学科調整者 長澤 亜由美
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 実習調整者 大西 恵梨
愛仁会看護助産専門学校 事務部長 木田 尚樹
愛仁会看護助産専門学校 事務部 川口 璃子(書記)

議事次第 挨拶

1. 学校長挨拶
2. 出席委員の紹介
3. 第1回テーマ「2024・2025年度学生状況報告とエンドオブライフケア実習Ⅰ・Ⅱの実施報告および検討」
 - ①藤尾副学校長より「2024・2025年度学生状況」の報告がなされた。
<意見交換>
(委員) 受験生は減ったのか。
(学校) 受験生は前年度の6割と大幅に減少した。入試形態を問わず全体的に減少傾向である。
指定校推薦の枠を増やし、入学生を確保している。
(委員) 貴校は定員の90%程度の入学率であり高水準である。
(委員) 社会人の入学状況はどうであるか。
(学校) 社会人入学者は1学年、2学年、3学年でほぼ同水準を維持している。
(委員) 専門学校・大学ともに学生確保が厳しい状況で、今後どのような人材を看護師にするか具体的に考える必要がある。

②清水教育主事より「エンドオブライフケア実習Ⅰ・Ⅱの実施報告および検討の報告がなされた。

<意見交換>

- (委員) 成人看護学実習Ⅲ(終末期)の実習を病院で行うことができていたのに、何故カリキュラム変更を
する必要があったのか。
- (学校) 定員が40名から80名になる際、急性期病院で80名の実習を受けてもらうことができず、
リハビリテーション病院で学生の半分を受け入れてもらっていたため。
- (委員) 終末期の言語定義を行い目標設定すれば、病院での実習のままでよかったのではないか。
なぜ老健で実習を行うことになったのか。

- (学校) 終末期という定義がある中で、リハビリテーション病院で実習を行うことに違和感があった。病院ではライフステージにおける終末期という捉え方をして、高齢者を対象とした実習であったが、老健に実習を行っていなかったことや老健では看取りを行っていることから実習場所を老健へ変更した。
- (委員) 終末期のがん患者は自宅やホスピスに入ったり、訪問看護へ誘導されていることが多いため、老健で学生が終末期を経験するのは難しい。アドバンス・ケア・プランニング (ACP) では、看護師が大きな役割を果たすので学生の教育に効果的であると思う。また、終末期の定義も変わってきているので、現在の定義を明らかにする必要がある。
- (学校) カリキュラムを作成した時代と現在とでは状況が変化しているので、対象等を変更する検討も必要である。
- (委員) 終末期に焦点を当てるのであれば、病院での実習は難しい。終末期のケアで学生に何を理解してほしいのかが見えにくい。今の到達目標であれば、実習場所として老人ホームや訪問看護ステーションに変更しても良いかもしれない。
- (委員) 学生全員の終末期を経験させたいのはわかるが、学校が考える終末期看護と、現在の終末期の考え方にギャップがあるので、議論し実習場所も在宅や老人ホームに変更するなどの検討が必要である。エンドオブライフケア実習ⅠとⅡを組み合わせは良い。実習を通して、患者の人生観や価値観を知り、看護に繋げられれば良い。学生の成績を見ると、5日間で学生の多くが目標を達成しているのは素晴らしく、方向性は間違っていないと思う。
- (委員) 少しでも家に帰りたい、自分のできることをやりたいと思っている人がいる老健の場をエンドオブライフに使ってほしくない気持ちはある。終末期の定義と考え方を整理し、痛みや苦しみを少しでも楽にできるケア方法とは何かという考え方のような実習を行ってほしい。
- (学校) 話を聞いてエンドオブライフ＝死が連想されるのを実感した。高齢者が最後までその人らしく人生を全うできるように、安寧に生活できることがすごく大事であり、その場면을学生に学んでほしいと思っている。言葉の定義の整理が必要である。
- (委員) 訪問看護ステーションの質評価の指標が看取りの件数となっているので、学生は終末期を見る経験はできる。
- (委員) 学校として学生に死を経験させたいというところから考え直さないといけないのではないかな。亡くなる場面が見れなくても ACP に関連することをしっかり学べるというのはすごく重要なことだと思う。
- (委員) 所属の学校では、実習で訪問看護ステーションに学生全員が行くことができていない状況である。看取りを中心にしている訪問看護ステーションが多いが、その実習施設確保が難しい。
- (委員) 訪問看護を行う過程で、人間の尊厳を大事にしていることが患者に伝わり、非常に良い終末を迎えられた人が多かったように思うので、人間の尊厳をこのように維持して終末を迎えるというような訪問看護で行う実習にしてはどうか。
- (学校) 地域・在宅看護論実習を法人内の訪問看護ステーションで実習を行っているが、看取りがない場合もあり、学ぶ機会がなくなる。学生が看取りを経験することで、3年間を通しての学びになると考え、絶対学生全員に学ばせないといけないという不安があったが、共有する機会を設けたり別の学ばせ方も検討したい。
- (学校) 現在、老健での実習で主の目標としているのは今この生活をいかに豊かにするかという部分であり、そこに向けた学生の学びもあるので、言葉の整理が必要だとわかった。

(学校) 千葉大学の資料によるとエンドオブライフケアというのは、以前の終末期や緩和ケアの代替語ではない。教員が勉強した上で、学生が将来看護師になった時に、この基礎教育でどの場面で何を分かってくれたらいいか、何を理解して知識に残してくれたらいいかを考えながらカリキュラムを構築していかないといけない。

本日いただいた助言を踏まえ、今後のカリキュラムについて検討していきたい。

以上